日本中國學會報　第七十三集
二〇二一年十月九日　發行　抜刷

慶暦後期における梅堯臣の詩と詩作の場

――韓維との應酬を中心に――

大井さき

慶暦後期における梅堯臣の詩と詩作の場

――韓維との應酬を中心に――

大井さき

はじめに

慶暦年間（一〇四一～四八）の八年のうち、後半の四年は、梅堯臣（一〇〇二～一〇六〇）の詩風が形成されていく過程において注目すべき時期である。従來詩にうたわれて來なかった日常生活の細部に目を向けるという傾向が顯著になり、律詩の對句の形式を敢えて崩すなどの試みがあったことも確認できる。唐までに形成された詩の定型から外れていこうとする意識が作中に窺えるようになったと言える。この時期の詩作の重要性はこれまでにも指摘されてきたが[1]、個々の創作實踐に踏み込んだ檢討は未だ十分になされていない。慶暦後期における創作上の工夫をたどっていくことで、梅堯臣が斬新な表現を手に入れていく過程を明らかにし、ひいては宋代の新たな詩風が確立するまでの紆餘曲折の一部を具體的に示すことができるのではないだろうか。本稿は、慶暦後期を視座として梅堯臣及び北宋の詩風の變遷をたどる研究の一環をなすものである。

慶暦後期における梅詩の變化の背景には、様々な要因の存在が想定できるが、本稿では詩作の場に注目する。この時期には、彼の對人關係も大きく變化したからである。それ以前とは異なる對人關係の中でどういった詩作が行われたのか、それが梅堯臣の詩をどのように變え得たのか、という問題について、作品に即して具體的に考察する。

一、慶暦後期の交流

慶暦後期には梅堯臣の詩作の場の様相が變化する。

まず活動據點が變わった。慶暦四年（一〇四四）夏以前は、南方を中心とする各地を轉々とした。洛陽の錢惟演の幕下で歐陽脩らと交遊した天聖九年（一〇三一）から二年ほどの期間を除き、知縣や監税官として建德縣（安徽省）や湖州（浙江省）などの地で過ごしている。一方、慶暦後期、すなわち慶暦四年八月に都汴京（河南省）に至ってから、八年夏に都を離れるまでの約四年間は、途中の許昌[2]（河南省）滯在期間を含めて、基本的に都周邊を往來した。具體的な動向は以下の通り。

慶暦四年　監湖州鹽税の任を終え、八月、汴京に至る。
慶暦五年　六月、汴京を發ち、許昌に赴任（簽書忠武軍節度判官）。

慶暦六年　夏、汴京にて再婚。潁州を經由し晏殊に謁見した後、許昌に戻る。
慶暦七年　秋、許昌にて任期滿了、汴京へ。
慶暦八年　春、國子博士となる。夏、汴京を發ち、揚州を經由し歐陽脩を訪ねた後、宣城に歸鄉。再び揚州を經由し、九月、陳州に赴任（簽書鎮安軍節度判官、晏殊の幕下）。

汴京及び許昌滯在中には、特定の相手との詩の應酬が活發になる。慶暦後期より前の時期には一人の相手に對し一、二首程度の應酬しか見られないが、慶暦後期には持續的に應酬を繰り返した跡が殘る。また、應酬した人物同士にも交流があり、集團での宴會や行樂も盛んである。慶暦後期以前の個別的な交流とは大きく異なる。

具體的に見てみる。主な交流の場は、汴京（慶暦四年秋～五年夏、六年夏、七年秋）と許昌（慶暦五年秋～六年春、六年冬～七年夏）とに分けられる。詩題に名前が明示されるなど特定の人物との關わりが讀み取れる詩には、多い順に、汴京では宋敏修（17首）謝景初（13首）裴煜（10首）宋敏求（9首）胥元衡（8首）など、許昌では韓絳（21首）韓維（18首）韓綜（18首）韓縝（14首）王素（10首）王沖（7首）孫永（7首）などがある。[3]

彼らにはいくつかの共通點がある。ひとつには、年齡層である。半數以上が一〇二〇年前後の生まれで、梅堯臣より十五～二十歳ほど若い。慶暦五年時點での年齡は、梅堯臣（44歳）に對し汴京では宋敏求（27歳）宋敏修（27歳未滿）謝景初（26歳）裴煜（不詳）胥元衡（18歳）、許昌では王沖（39～58歳）王素（39歳）韓綜（37歳）韓絳（34歳）韓維（29歳）韓縝（27歳）[4]。また、經歷がよくわからない裴煜を除く全員が、かつて高官であった人物を親族にもち、その蔭によって官職を得ている。右に擧げた十一名のうち同姓の人物はいずれも兄弟で、それぞれがかつての宰相または副宰相である宋綬、王旦、韓億を父に持つ。さらに、この時期の前後に進士の身分を得ている點も共通する。韓絳、韓縝は慶暦二年に、謝景初、裴煜、孫永は慶暦六年に及第した。ちなみに韓綜は天聖八年（一〇三〇）に及第し、王素や宋敏求兄弟は慶暦三年までに同進士出身を賜っている。いずれも將來有望といってよく、實際後に多くが政界で活躍することになる。彼らとの交流には當然、士大夫として人との繋がりを確保しておく目的もあっただろう。とはいえ慶暦後期の時點では、數人を除いて官位はまだ低かった。[5]

交流相手の年齡層の低さ、及びそれに伴う官位の低さは、慶暦後期以前の交流と大きく異なる點である。この變化は、應酬のあり方に影響を與えた。朱新亮「文人群體交游唱和及其對詩風的影響—以梅堯臣爲例[6]」に「梅堯臣作爲幕職州縣官員與地方府主的身份差距讓他的詩歌主題・風格皆向胡宿・晏殊等人靠攏、具有詩以悅人的明顯特徵。梅堯臣在汴京與宋敏修・裴如晦等人的詩歌交往則展露着他難爲人知的隱晦心曲、也爲其詩歌帶來許多飲酒聚會・取笑打鬧的日常生活題材。（梅堯臣が幕僚や地方官の立場にある時は、長官との身分の違いが、彼の詩の主題や風格を胡宿や晏殊らのそれに近づかせ、詩によって人を喜ばせようという明らかな特徵を與えた。汴京における宋敏修や裴如晦らとの應酬では、窺い知れない複雜な胸の内を曝け出し、さらに彼の詩に酒宴やお遊びといった日常生活の多くの題材をもたらした。）」として、上官との詩作と友人との詩作とで梅堯臣の創作態度が異なること、友人との應酬の中で日常生活が題材となることを指摘する。胡宿（九九六～一〇六七）と晏殊（九九一～一〇五五）は、いずれも梅堯臣の直接の上官だった。晏殊と

はその幕下に入る以前にも一度面會しており、その時點では上官でこそなかったが、やはり元宰相という肩書きは大きかった。相手の風格に合わせようとするのは當然だろう。その態度は、妻の兄である謝絳（九九四～一〇三九）に對する作にも見える。[7] 姻戚關係にあり、交流が極めて密であっても、身分や年齢の差が梅堯臣に一定の制限を與えたはずである。

慶曆後期の交流相手は多くがそのような制限を意識するほどの地位にまだなかった。すでに比較的高位にいた數人も、直接の上官ではない。胡宿らとのそれとは異なる對人關係が想定できそうである。とすれば、慶曆後期の詩の變化についても、相手が年少者であることが關わっていると考えられる。

二、詩作を促す若者たち

慶曆後期の主要な交流相手であった若者たちとの詩作の場についてまず確認しておきたいのは、彼らが梅堯臣にとって共に詩を語り合うに足る相手だったことである。從來指摘される通り、この時期の梅堯臣詩には詩を論じる作が集中して現れ、ほとんどが汴、許で交流した若者たちに贈られている。[8] 梅堯臣の詩論に關する研究によく取り上げられるものに、「答中道小疾見寄」「答裴送序意」「寄宋次道中道」（慶曆五年）、「寄滁州歐陽永叔」「答韓三子華韓五持國韓六玉汝見贈述詩」「依韻和晏相公」（慶曆六年）がある。このうちの一首から、梅堯臣の詩作に對する若者たちの姿勢が窺える箇所を拔粹する。全四十四句の作の前半で理想とする詩のあり方や現狀への不滿を示したのに續いて、次のように語る。

「答韓三子華韓五持國韓六玉汝見贈述詩」（慶曆六年、卷一六）[9]

33 予言與時輩　予が言　時輩に與ふるも
34 難用猶篤癃　用ひ難きこと猶ほ篤癃のごとし
35 雖唱誰能聽　唱ふと雖も誰か能く聽かん
36 所遇輒瘖聾　遇ふ所は輒ち瘖聾なり
37 諸君前有贈　諸君　前に贈る有り
38 愛我言過豐　我を愛して言　過豐なり

私の言葉を今の人々に聞かせても、まるで病人のように扱いづらいと見なされました。聲高に訴えても聞き入れ難いようで、出會うのは口がきけず耳が聞こえぬ者ばかり。先日あなた方は詩を贈ってくださり、私を重んじ、過分な言葉を盡くしてくれました。

彼らは梅堯臣の發言に耳を傾けてくれる貴重な仲間だった。多くの年少者が梅堯臣の下に集まったのは、梅堯臣の詩名が高まってきたことに加え、彼が抱く現狀への不滿が若者たちの不滿と重なる部分を持っていたからだろう。

詩論の內容と實作に見える新しさとの關係は稿を改めて檢討する必要があるが、若者たちは梅堯臣が作る新しい詩に對して確かに好意的だった。それは、彼らがしばしば梅堯臣に主題を提示して詩作を求めたことから窺える。例えば「師厚云蝨古未有詩邀予賦之」（慶曆五年）、「鬬雛鶉孫曼叔邀作」（慶曆六年）、「西湖觀新出鵝兒道損持國曼叔請予賦之」「記春水多紅雀傳云自新羅而至道損得之請余賦」「詠象韓子華邀賦」（慶曆七年）などが擧げられる。また、詩題に「邀」「請」の語は見えないが、孫永が蝙蝠を捕らえる隼を見かけたのを梅堯臣に話したこと（「孫曼叔暮行汴上見鶻擊蝙蝠以去語於予」）や、珍物を贈答品にする

こと（「病癰在告韓仲文贈烏賊觜生醋醤蛤蜊醤因筆戯答」「答持國遺鮒魚皮膾」「和韓子華寄東華市玉版鮓」など）も、一種の題材提供と言えるかもしれない。慶暦三年以前には「命賦」の作が見られるが、目上の相手から遊覽の場で求められたもので、性質が異なる。若者たちに求められて詠じる對象には、日常の中でふと目にした物や發生した事柄もあれば、殊更に探して來たような特殊な事物もあるが、總じて主題としておもしろそうなもの、詠じにくそうなものと言えそうである。

若者たちが詩作を求めた斬新な主題は、斬新な表現を生む可能性を保證した。實際、蝨を詠じる作には「古來詩にうたわれていないため」と彼らが詩作を要望した動機を明言する。さらに、受け取り手が特定でき、相手が豫め描かれる內容を知っているという創作條件も、表現の自由度を高めただろう。それでは實際にどのような詩が作られたのか見てみたい。

「韓持國邀賦鬬山鵲」（慶暦六年、卷一六）

1俗有巧鬬心　俗に巧鬬の心有りて
2畜此巧鬬禽　此の巧鬬の禽を畜（やしな）ふ
3搏擊無迅節　搏擊　迅節無きも
4爪觜自相侵　爪觜　自（おのづか）ら相侵す
5胡能知遠人　胡（なん）ぞ能く遠人の
6角勝合百金　角勝して百金を合するを知らんや
7鳳皇安在哉　鳳皇　安くに在りや
8徒此望丹岑　徒（ただ）此（ここ）に丹岑を望む

世の人々には巧みに鬬おうとする氣持ちがあり、この巧みに鬬うことのできる鳥を育てている。打ち叩くのに素速さはないが、爪や嘴が互いを傷つけ合う。鳥たちは、遠卷きに見ている人々が競い合って大金をかき集めていることなど知りもしない。鳳凰はどこに行ってしまったのだろうか。ひたすらここで鳳凰が棲むという丹穴の山の方を眺めるしかない。

韓維に山鵲を鬬わせる遊戯をうたうことを求められての作である。山鵲という鳥は古い文獻や詩の中にごくわずかしか取り上げられていない。リクエストはその難しさを狙ったものだろう。先行する記載をほとんどもたない山鵲を、古くより詩に見える「鬬雞」とうたい分けつつ描くことを求めたのである。梅堯臣以前の文獻に見える山鵲の主な特徴は、外見の美しさである。例えば、『爾雅』釋鳥「鷽、山鵲。」の郭璞注に「似鵲而有文彩、長尾、觜脚赤。（鵲に似て文彩有り、長尾にして、觜脚赤し。）」と、司空圖の詩にも「翠衿紅觜便知機、久避重羅穩處飛（翠衿　紅觜　便ち機を知り、久しく重羅を避け穩處に飛ぶ）[10]」と見える。しかし、梅堯臣はその特徴的な外見を描こうとはしない。それどころか、山鵲と特定できるような描寫をほとんどしない。山鵲らしさと言えそうなのは、わずかに「無迅節」のみである。「節が無い」という表現からの連想だろうか、梅堯臣の筆は山鵲の鬬いぶりから、鬬いを見守る周圍の人間にまで及ぶ。これは從來の「鬬雞」詩と異なる點である。曹植「鬬雞詩」「長筵坐戯客、鬬雞觀閒房（長筵　戯客坐し、鬬雞　閒房に觀る）[11]」のように觀賞の樂しみをうたう例はあるが、賭け事をする人々を客觀的に取り上げることは、從來ほとんどなかった。その場に存在しているが從來詩の對象とはならなかったものに筆を及ぼしているのである。

梅堯臣は、山鵲の「巧鬬」と人間の「巧鬬」とを對比的に配置する。

第1句が人、第2句が鳥、第3・4句が鳥、第5・6句が人である。「巧」はずるいという意味も含むだろう。勇壯な鬬雞と違って、速いリズム（迅節）がないのに相手を傷つけるという、山鵲の鬬いのずるさをうたう。それ以上に狡猾なのが人間の「巧鬬」で、離れた所で見ているだけなのに賭けで大金をかき集める。「遠人」は、詩の用例では多く旅人など遠方にいる人を指すが、ここでは遠卷きに見ている人々を指す。既定の用法にとらわれない言葉選びで、自らは傷つくことなく利益を得るという、人間の鬬いの不誠實さ（無節）を巧みに表している。

山鵲のようなうたいづらい對象を提示する多少無茶な要求にも、梅堯臣は積極的に應じる。ただ難しい要求を切り拔けるのみではなく、さらに出題者の意表を突こうとする。その結果が、斬新な發想なのである。この斬新さは、日常生活の細部をうたうこととも通じる。通常目に入らないようなものを取り上げるからである。若者たちに詩を求められたことが、慶曆後期の詩の特徴が形成される契機となったのである。

この詩には、出題者の韓維が唱和した作が殘っており、梅堯臣の作に對する反應を知ることができる。

韓維「和聖俞鬬山鵲」（『南陽集』卷五）

1禀此分鬬姿　此に禀（あた）ふるに鬬姿を分かち
2用舍在所激　用舍は激する所に在り
3翻跳巧相中　翻跳して巧みに相中（あ）つるも
4一敗軀命擲　一たび敗るれば軀命擲（なげう）つ
5晨雞鳴不渝　晨雞は鳴きて渝（か）はらず
6霜隼時乃擊　霜隼は時に乃ち擊つ
7既無一二效　既に一二の效無くんば
8豈不媿肉食　豈に肉食を媿（は）ぢざらんや

天はこの鳥への授け物として戰鬬の資質を分け與えた。用いられるか捨てられるかは勇猛さ次第である。舞ったり跳ねたりして巧みに攻擊し合うが、ひとたび敗れれば命を投げ出すことになる。雞は朝になるといつも變わらず鳴くし、隼は霜の時節が訪れれば狩りを行う。わずかな功績もないこの鳥は、上等な餌を食らうことを恥じないでいられようか。

やはり山鵲の色鮮やかな姿は描かれない。梅堯臣が單純な外見の描寫を避けた以上、韓維もその手段は選べなかったのだろう。そこで用いたのが、他の鳥との比較である。鬬うために人に飼われる點が山鵲と共通する雞と隼を持ち出し、二鳥との違いから山鵲の性質を描き出そうとする。朝に鳴く雞と霜の降りる頃に狩りをする隼は、いずれも行動に秩序があり人の役に立つ。それらに對し、山鵲は無秩序に、何の意味もない鬬いを繰り返すというのである。その上で、「用舍」「無效」といった人間の描寫にも用いることのできる語を配置する。「肉食」は山鵲自體の習性であると同時に、高い俸祿を得る者という意味も兼ねる。人間社會と二重構造にする工夫である。梅詩が「鳳皇」を描くことで「遠人」の「無節」を際立たせたことを踏まえての表現だろう。難題に自らも挑戰し、梅堯臣の作に和すという制限を受けながら對象を描き出そうと奮鬬しているのがわかる。こうした相手の反應も梅堯臣にとって刺激となり、さらなる高難度に挑戰する意欲をかき立てたのではないだろうか。梅堯臣のうたい方に同調し、その詩作を

促す若者たちの存在が、慶暦後期の創作の背景にあったと言えるだろう。

三、表現の逸脱が許される場

續いて、慶暦後期の詩作の場が梅堯臣の詩をどのように變えたのか、個々の表現に着目して檢討していく。この時期盛んに應酬した若者たちの大半には、殘念ながら檢討できるほどの作品が殘らない。唯一の例外は韓維（一〇一七～一〇九八）である。集三十卷、約九四〇首の詩が殘り、うち慶暦後期の梅堯臣の作と對應するものは八首ある。梅詩に殘る韓維との應酬の跡は、汴京及び許昌における交流の中でも多い方であり、韓維の年齢や職位は他の交流相手の大半と共通する。慶暦後期の交流の代表と見なして問題ないだろう。以下、韓維との應酬を手がかりに分析を進める。

韓維との應酬は、梅堯臣が許昌に赴任した後の慶暦六年より見られ、年末から七年夏の間に特に盛んに行われる。大半は梅堯臣の方が和す形である。その中で梅堯臣は表現の逸脱を繰り返す。

韓維「從道損舅乞移山藥」（慶暦六年、『南陽集』卷一）

1 弱歳抱衰病　　弱歳　衰病を抱き
2 好讀神農經　　好みて神農經を讀む
3 雜然衆藥品　　雜然として藥品衆（おほ）く
4 物識性與形　　物（ほほ）　性と形とを識（し）る
5 商於巖谷間　　商於　巖谷の間
6 厥產芝朮菁　　厥（そ）の產は芝朮菁
7 山家乘冬採　　山家　冬に乘じて採り
8 氣烈味亦幷　　氣烈しく味も亦た幷（なら）ぶ
9 常思負籠往　　常に思ふ　籠を負ひて往き
10 厲此地氣靈　　此の地氣の靈なるを厲（ほ）らんことを
11 近聞山旁縣　　近ごろ聞く　山旁の縣より
12 移本來公庭　　本を移して公庭に來たらしむと
13 石泉尙含潤　　石泉　尙ほ潤ひを含み
14 溪風有餘清　　溪風　餘清有り
15 想像春叢敷　　想像す　春叢敷きて
16 蔚蔚揚華英　　蔚蔚として華英を揚ぐるを
17 駢羅良可佳　　駢羅　良（まこと）に佳（よみ）すべく
18 疲薾宜見矜　　疲薾　宜しく矜（あは）れまるべし
19 安得畦畹餘　　安くんぞ畦畹の餘に
20 種食羽翼生　　種ゑ食らひて羽翼生ずるを得ん

若い頃から體が弱く病氣がちで、『神農經』を好んで讀んでいました。多種多樣な藥の性質や外形は、だいたい見分けることができます。商於は谷あいの地で、その產物は靈芝、朮（オケラ）、菁（カブラ）などの藥草です。山に住む人が冬のうちに採取し、氣象が嚴しいので味もきつくなります。籠を背負って行き、地の氣を受けたこの靈藥を掘りたいと常々思っていました。近頃聞くには、山邊の縣から、役所の庭に移植したとのこと。未だ湧き水の潤いを含みもち、谷を拔ける風の淸々しさをたっぷりと殘していることでしょう。春になって葉むらが廣がり、こんもり茂って花を搖らしているさまを想像してみます。ずらりと竝んで實に見事ですから、あなたは疲れ果てた私を憐れんでお分けくださるはず。なんとかこれを畑の餘りに植えて食べ、羽が生えたように身輕になりたいものです。

詩題の「道損」は韓維の叔父である王沖（生沒年不詳）の字である。「山藥」は「薯蕷」すなわちヤマイモの別名だが、ここでは第6句にいう「芝朮菁」を指し、ひろく山の藥草の意味だろう。[12] 韓維が王沖に山藥の苗を分けてくれるよう賴む詩を作り、梅堯臣がそれに唱和したものである。

詩中の語は、主題を同じくする先行作品の語と類似する。第1～4句は韋應物「種藥」「好讀神農書、多識藥草名（好みて神農の書を讀み、多く藥草の名を識る）[13]」を四句に引き延ばし、第16句は、柳宗元「種仙靈毗」「蔚蔚遂充庭、英翹忽已繁（蔚蔚として遂に庭に充ち、英翹がりて忽ち已に繁し）[14]」を一句に縮めたようである。「想像」と「蔚蔚」は音の反復をもつ語を對とし、「駢羅」「疲薾」は同義の二字を組み合わせた語を對とする。「疲薾」の「薾」などはあまり見慣れない字のようだが、謝靈運「過始寧墅」「緇磷謝清曠、疲薾慙貞堅（緇磷 清曠を謝し、疲薾 貞堅に慙づ）[15]」などの例があり、他「駢羅」などの語もみな古くより詩に使われる。結びは山藥の效果への期待をうたう。「羽が生える」とは病氣が治って體が輕くなることを表すが、曹丕「折楊柳行」に「服藥四五日、身體生羽翼（藥を服して四五日、身體 羽翼を生ず）[16]」とあるのをはじめ、仙藥の描寫にほぼ同じ表現が常見される。韓維はそれを踏まえ、山藥を仙人になることのできる妙藥に擬えて贊美する。

全體として、既存の作の語を用いつつ表現を技巧的にすることで、山藥を美しいものとして描寫し、なんとしても入手したいという氣持ちを表現する。詩の作り方としては、型通りと言っていいだろう。これに和す梅堯臣は、主要な描寫對象である山藥について韓維とは全く異なる描き方をする。

梅堯臣「和韓五持國乞分道損山藥之什」（卷一六）

1 不種東陵瓜　東陵の瓜を種ゑず
2 不利千畦韭　千畦の韭に利あらず
3 山藥數十本　山藥 數十本
4 帶土移野叟　土を帶びて野叟に移さる
5 故葉萎未醒　故葉 萎えて未だ醒めず
6 傷根亦何咎　傷根 亦た何の咎あらんや
7 既爲君子好　既に君子に好まるれば
8 豈與騷人負　豈に騷人に負かれんや
9 騷人比畫工　騷人 畫工に比ひし
10 丹青出其口　丹青 其の口より出づ
11 欲分欄下苗　欄下の苗を分かたれんことを欲し
12 馳奴仍置簍　奴を馳せて仍りて簍を置かしむ
13 主人可無吝[17]　主人 吝しむ無かるべし
14 所尚非獨有　尚ぶ所は獨有に非ず
15 從茲各勤灌　茲從り各おの灌ぐに勤め
16 肯在園蔬後　肯へて園蔬の後に在らしめんや
17 今雖勝曝蓄　今は曝し蓄ふるに勝ふと雖も
18 畢意資玉臼[18]　意を畢くすも玉臼に資せんとす
19 人事固已然　人事 固より已に然り
20 祕方看繫肘　祕方は肘に繫くるを看ん

うまい瓜を植えるのではなく、廣い畑のニラで儲けるのでもなく、山の藥草數十本が、土を纏ったまま山中の老人によって移植されました。古い葉は枯れて目覺めておらず、傷ついた根も何の罪があったというのでしょう。すでに王さんのような君子に好まれたからに

は、詩人たる君に氣に入られないはずはありません。この詩人は畫家のようで、赤や青の美しい色彩を口から吐き出します。柵の下の苗を分けてもらおうと、下男を走らせ、そして籠を置かせます。主人はきっとけちけちしたりしないでしょう。獨占を好む人ではありませんから。これ以降、あなた方はそれぞれ水やりに勵み、それを野菜の後ろに控えさせておこうとはしないでしょう。ひとまず藥草は日干しされてしまい込まれるのに耐えていますが、そうして心を盡くしても、結局は臼のために身を碎かれてしまうのです。人の世も同じです。祕傳の藥方などは、手元の醫學書を見れば良いのです。

梅堯臣の山藥描寫は、韓維のそれと明らかに違う。王沖の元に移されたばかりの狀態については、韓維の第13・14句「石泉尙含潤、溪風有餘淸」が湧き水の潤いと谷風の淸々しさをもつとするのに對し、梅堯臣の第5・6句「故葉萎未醒、傷根亦何咎」は葉が枯れ根が傷ついた痛ましい姿をうたう。同じ場面の、同じ物であるはずなのに、まるで正反對であるかのように描き出すのである。

想像で描かれる移植後の山藥の姿も對照的である。韓維が第15句「想像春叢敷」から四句で、春に花が咲きみだれ、ずらりと竝ぶ姿を描くのに對し、梅堯臣は第15句「從茲各勤灌」から四句で、大事に育てられはするものの、日干しされ貯めておかれた擧げ句、最後には臼で粉々にされてしまうという悲慘な結末を描く。第19句はこれを人間に擬えて、どれほど抗っても結局は死ぬものだと言うのである。第20句「繫肘」は肘に掛けて携帶すること。醫藥に關する文脈では晉・葛洪『肘後備急方』の書名に基づき、急場に備えた携帶醫學書や處方箋を指す。祕傳の藥方など、手元の醫學書で充分であり、わざわざ貴重な藥草を取り寄せる必要はない。不老長壽などもとより不可能なのだからと、仙藥のように藥草を崇める韓維を笑うのである。韓維詩の描寫の鮮やかさを評價したかに見える第9・10句も、韓維が萎れた苗を美化したことを指摘してからかっているのだろう。山藥に對する韓維の贊辭を臺無しにする、辛口の冗談である。辛口の冗談は相手を選んで言わなければならない。謝絳や晏殊のような目上の存在に對しては無理だろう。

また、この詩には、容易には理解しがたい表現がいくつか見られる。例えば第9・10句は、主語を山藥から騷人に切り替えたとたん、唐突に畫家に喩え始める。ここには明らかに飛躍がある。後で「欲分」とあるので、詩によって山藥を求めたと理解できないわけではないが、先に話題を轉換しておいて、後で全篇に繫げるうたい方である。互いが狀況を把握しているため、既知の事情を省略したように見える。また第15句「從茲各勤灌」は、王沖と韓維とが山藥の水やりに勵むことをいうが、主語が前と異なるのにそれを言わず、水を與えられる對象も明示しないため、やはり前提がないと戸惑うような表現である。この詩のように對人關係の中で作る場合、求められて作る詩と同樣、受け取り手が特定されている。和詩であるので、やはり相手には初めからうたう內容がわかっている。そのため、ある程度無理のある表現が可能となるのである。

第17句「曝蓄」も、詩にも散文にも用例がない特殊な表現である。藥を日干しすること、使わずに貯め込むこと、という二つの行爲を組み合わせた梅堯臣の造語だろう。恐らく韓維が用いた柳宗元「種仙靈毗」「蔚蔚遂充庭、英翹忽已繁」のすぐ後の句「晨起自採曝、杵臼通夜喧（晨起きて自ら採りて曝し、杵臼通夜喧（かまびす）し）」を意識したものだろ

う。かつ、「曝蓄」は疊韻、「玉臼」は雙聲を爲し、韓維の字音を用いた技巧に對應する。韓維の技巧のさらに上手を行き、さらに斬新にして見せているのである。唱和相手への對抗意識が、新しい言葉を生み出す要因となっているのであり、詩作の場が詩の表現に影響を與えていくさまがはっきりと見て取れる。

韓維が型通りのうたい方をし、梅堯臣がそれを崩そうとする。二人の應酬は總じてこの傾向にある。梅堯臣は往々にして、韓維と同じ對象に對して正反對の描き方をし、韓維の作り出した雰圍氣を臺無しにする。或いは韓維の詩にその要素が全くなくとも、日常生活の細部を突然うたい込む。いくつか例を擧げてみよう。

韓維「新植西軒」（慶曆七年、『南陽集』卷一）

5陽條散繁華　陽條　繁華を散らし
6怒甲擎故朽　怒甲　故朽に擎げらる
7封培童僕勞　封培して童僕勞れ
8窺看孩稚走　窺看して孩稚走る
9雖非觀游盛　觀游の盛んなるに非ずと雖も
10要是吾廬有　要ず是れ吾が廬の有つならん
11壤疏人力薄　壤疏くして人力薄ければ
12開發定遲後　開發　定めて遲後せん
13所賴春風意　賴む所は春風の意の
14與物無薄厚　物と薄厚無からんことなり

日なたの枝は咲き誇った花々を散らし、萠え出た芽は枯れ枝に掲げられている。下男たちは盛り土をしてへとへとになり、幼い子どもたちは庭を覗き見て走り回る。見て樂しむのに秀でた場所ではないが、小さな我が家の持ち物となるはずだ。土壤は質が惡く勞働力も不足しているので、開拓はきっと難航するだろう。賴みは春風の情けが、萬物に對して平等であろうこと。

梅堯臣「依韻和持國新植西軒」（卷一七）

5盎中植菡萏　盎中に菡萏を植ゑ
6水不過升斗　水は升斗を過ぎず
7小桂未得地　小桂　未だ地を得ず
8驗活徒掐朽　活きたるを驗さんとして徒らに朽ちたるを掐む
9上乏幽禽啼　上には幽禽の啼くこと乏しく
10下多穴蟻走　下には穴蟻の走ること多し
11藥苗雖無補　藥苗　補ふ無しと雖も
12欲比山中有　山中に有るに比ひせんと欲す
13澆灌同一時　澆灌　同に一時なるも
14萌芽或先後　萌芽　或いは先後す

かめの中に蓮を植えたが、水はわずか一斗ばかり。小さな桂の木はまだ土地に馴染めておらず、生きているかを確かめようと意味もなく枯れ枝をひっかく。木の上には奥山の鳥はおらず、木の下には穴に棲む蟻たちがたくさん走り回っている。藥草の苗はまだ役に立たないが、山中のそれに肩を竝べたがっているようだ。水をやったのは同時なのに、芽を出すのは早いものと遲いものとがある。

全二十六句のうち、詩題にいう「新植」、植えたばかりの植物に關わる部分である[19]。韓維は花や新芽の生氣溢れるさまを描く。謙遜をまじえながら、全篇で新築の建物と庭の素晴らしさを語る。

梅堯臣は植えたばかりの植物一つ一つを竝べていくが、やはり韓維の滿足感に水を注すような描き方をする。極端なのは桂の描寫である。奥山を思わせるような鳥の代わりに蟻が走り回っているというのは、韓維が子どもたちや下男の姿を描く句に對應するものとはいえ、人の家の庭にしては遠慮のない描き方と言えよう。藥草がまだ役に立たないとするのも同様で、わざわざ言うことでもない。

諧謔を交えながら、梅堯臣は様々な植物の「新植」のさまを斬新な言葉で描き出そうとする。特に第8句は、「活」「朽」がそれぞれ目的語として獨立しており、讀みづらい。柳宗元「種樹郭橐駝傳」に「甚者爪其膚以驗其生枯、搖其本以觀其疎密、而木之性日以離矣。（甚だしきは其の膚に爪して以て其の生枯を驗し、其の本を搖すりて以て其の疎密を觀、而して木の性 日に以て離る。[20]）」とあるのを意識しなければ、意味を取ることが難しいのではないか。和韻のため韻字の「朽」が固定されたこと、韓維が枯れ枝の意味で「故朽」の語を用いたことが、この表現を生み出すひとつの契機になっただろう。柳宗元の文を踏まえるに當たり、梅堯臣は「驗」以外の全ての語を換えてしまった。「爪」を言い換えたと思われる「掐」は、爪で押したりつまんだりする動作を表すが、用例の多い語ではない。このような大膽な引用は、うたう内容が共有された場だからこそ可能だったのではないか。唱和という狀況が、飛躍のある發想を促し、表現の自由度を高めているのである。

續いて、梅堯臣宅で開かれた集まりの後、韓維ら兄弟から贈られた感謝を述べる詩に答えた作も見てみたい。韓維の詩「飲聖俞西軒」（『南陽集』卷五）は一貫して宴席における梅堯臣の發言を稱えるのみでやはり型通りなのに對し、梅堯臣は新たな要素を追加して型を崩していく。韓維の詩に對應する内容のない十六句を擧げる。

梅堯臣「奉和子華持國玉汝來飲西軒」（慶曆六年、卷一六）

9 自中將過晡　中自りして將に晡を過ぎんとし
10 留飯具麄糲　留め飯らはして麄糲を具ふ
11 薄酒繼以斟　薄酒 繼ぎて以て斟み
12 不覺寒日沒　寒日の沒するを覺えず
13 愚妻方罷沐　愚妻 方に沐を罷め
14 供飯愧倉卒　飯を供するに倉卒なるを愧づ
15 凍婢昧煎和　凍婢 煎和に昧ければ
16 親調首忘鬅　親しく調へて首は鬅を忘る
17 每食各驚顧　食らふ毎に各おの驚顧す
18 誰謂不黔突　誰か謂はん 突を黔ませずと
19 倦僕暖吾薪　倦僕 吾が薪に暖まり
20 饑馬飽吾秣　饑馬 吾が秣に飽く
21 馬無歸嘶聲　馬に歸嘶の聲無く
22 僕有顏色活　僕に顏色の活くる有り
23 安穩不知疲　安穩として疲れを知らず
24 明缸仍爲撥　明缸 仍りに撥せらる

晝から語らううちに夕方とも言えない時間になってきたので、皆さんを引き留めて粗末な食事を用意します。薄い酒を次から次に酌み交わし、寒空の太陽が沈んだことにも氣が付きません。愚妻はちょうど髪を洗い終えたところで、食事を出すのにバタバタしてお恥ずかしい限りです。凍えた下女は料理に疎いので、妻自らが調味して髪飾りを付けるのも忘れています。皆さんは箸を付けてはぎょっとして顏を見合わせます。忙しいわけでもないのに炊事が碌にできないとは思わなかったでしょうから。それでも皆さんの疲れた下男は

私の薪で暖を取り、飢えた馬は私の秣で満腹になります。馬は歸りたいと嘶くこともなく、下男は生き返った顔をしています。ゆったり落ち着いて疲れを感じず、燈火は何度もかき立てられます。

料理し、給仕し、食べる様子や、下男、客の馬など、いずれも宴の場に存在しないはずはないのに從來詩人の筆が及ばないもの、たまたま及んだとしても細かに觀察されることはまずないであろうものが描かれる。韓詩は全三十二句、梅詩は全四十二句、梅詩の方が十句分引き延ばしてある。梅詩は入聲韻で一韻到底なので、句を引き延ばすことで難易度を高め、技量を示す狙いはあっただろう。内容から言えば、この箇所の要點はやはり韓維らへの戯れにある。第18句は日頃炊事をしていないかのような閒に合わせの料理を出したことと、第1・2句に「我誠官局冷、終日事靡括（我 誠に官局冷にして、終日 事の括る靡し）」と語る自身の生活ぶりが、炊事の暇もなく天下のために奔走した墨子[21]とは正反對のものであることとを重ねて表す。韓維が梅堯臣を「秀儒」と見なし、「我ら兄弟に大業を成させようと教え導いてくださる」と稱贊したことを承け、梅堯臣は彼らの狼狽えるさまを描いて「本當はそんな大層な者だとは思っていないでしょう」と揶揄するのである。續く下男と馬の描寫では「吾薪」「吾秣」の語によって彼らが梅堯臣宅の恩惠を受けたことを強調し、滑稽味を生み出す。こうした戯れが、日常生活の細部を詩の中に持ち込むという、從來の詩に見られないような表現の逸脱を導いたのである。

右の詩からは、韓維の兄弟たちも梅堯臣による「表現の逸脱」を好意的に受け取ってくれる相手だったことがわかるが、他の交流相手の若者たちについても同じことが言えそうである。梅堯臣は、相手によって程度に差はあれ、やはり殊更に美化することなく物を描き出したり、日常生活の細部を取り入れたり、特殊な表現を用いたりする。汴京での交流から、一例擧げる[22]。謝景初（一〇二〇～一〇八四）、晉元衡（一〇二八～一〇六六）、裴煜（生沒年不詳）とともに書齋に泊まったときの作である。

「雨中宿謝胥裴三君書堂」（慶曆五年、卷一五）

1急雨射窗鳴　急雨 窗を射て鳴り
2燈殘我正寢　燈殘して 我 正に寢ねんとす
3穴蚓聲苦長　穴蚓 聲苦だ長く
4流響入孤枕　流響 孤枕に入る
5衆醉如不聞　衆醉ひて聞かざるが如く
6强聒亦已甚　强聒も亦た已甚し
7夜短竟無寢　夜短くして竟に寢ぬる無く
8困瞳劇塵磣　困瞳 劇しく塵磣す

激しい雨が窗に打ち付けて音を立てる。燈火は盡きかけ、私はちょうど眠ろうとしていた。穴の中の蚯蚓は聲を長く引いて鳴き、その響きは獨り寢の枕もとまで流れてくる。醉った人々にはそれが聞こえないようで、くどくどと話し續ける聲も非常に喧しい。夏の夜は短く、とうとう眠ることができなかった。疲れた目は塵が入り込んだようにひどく霞んでいる。

夜の描寫なので、聽覺による表現を主として用いる。孤獨や靜寂を際立たせる雨音、古來「歌」と稱される蚯蚓の聲により、夜更けの情緒を作り出す。その上で、風情を解さない三人の若者の喧騒が

雰圍氣を打ち破る。「衆醉」は『楚辭』漁父「衆人皆醉我獨醒（衆人皆醉ひて我獨り醒む[23]）」による。「强聒」は『莊子』天下に「以此周行天下、上說下敎。雖天下不取、强聒而不舍者也。故曰、上下見厭而强見也。（此を以て天下に周行し、上に說き下に敎ふ。天下取らずと雖も、强聒して舍（お）かざる者なり。故に曰く、上下に厭（いと）はるるも强ひて見（まみ）ゆるなりと。[24]）」と見える語で、强引に口やかましく說き勸めること。批判的に語られる言說を引用して、醉った三人が夢中で議論を鬬わせるさまを揶揄する。第7句も單體で見れば傳統的な眠れぬ夜の描寫と變わらないが、その原因が滑稽味を與える。定番の表現を用いながら實際の狀況との落差で諧謔を弄するわけで、定型の利用が意圖的であることがわかる。韓維の型通りの詩に對してそれを崩していったように、ここでは自身が設定した詩的な雰圍氣を自ら崩しており、それが相手への戯れとなる。一人離れた所から若者たちを笑う梅堯臣の姿には、年齡の面で一線を引きつつも親しみをもって付き合うという、彼らに對する距離感がよく表れている。

以上に見てきたように、若者たちとの詩作の場には、相手が年少者であるという氣安さ、互いに詩の內容が豫め推察できるという自由さがあった。そうした場での詩作は、新しい表現を生む可能性を孕むものであったことが窺える。

おわりに

慶曆後期における若者たちとの詩作の場は、梅堯臣に斬新な發想を與え、自由な表現を保證した。對人關係の變化が梅堯臣の詩風に變化をもたらしたのである。この變化は、梅堯臣詩全體及び北宋中期における詩の變遷の中で、どのように位置づけられるだろうか。慶曆後期時點での梅堯臣と交流相手の立場を見た限り、當時の士大夫社會に直接影響を與えたとは考えづらい。交わされた詩の內容も非常に個人的、日常的である。洛陽の錢惟演幕下での唱和や嘉祐二年（一〇五七）の禮部唱和などとは明らかに性質が異なる。社會全體との關連として想定できるのは、次の二つである。

一つは、この應酬が交流相手の若者たちの詩に影響を與え、それが後に續く世代の詩を變えていったというものである。[25] 韓維以外の人物については殘る詩が少なく檢證が難しいが、神宗期に韓絳が參知政事となったのを始め、韓維、韓縝、孫永、宋敏求など多くが政界の中心で活躍する。裴煜、宋敏修らも司馬光や王安石といった當時要職にあった人物との間に交流の跡を殘す。彼らが影響力の大きい立場、人間關係の中にいたことは間違いなく、當時の詩壇全體に影響を與えた可能性は充分に考えられる。梅堯臣以降の世代との關わりについてはまだ調査が及ばないところであるので、今後の課題としておきたい。

もう一つは、慶曆後期の詩作活動がそれ以降の詩作へと繼承され、梅堯臣自身の作が周圍の文人や後の文人たちに影響を與えたというものである。例えば、歐陽脩の「寄題劉著作羲叟家園效聖俞體」（嘉祐四年（一〇五九））、陸游の「寄酬曾學士學宛陵先生體比得書云所寓廣敎僧舍有陸子泉每對之輒奉懷」ほか十首など梅堯臣の體に倣うことを詩題にはっきりと示した作品群の存在がそれを示唆する。梅堯臣詩の宋詩全體に對する影響を考える上で檢討すべき作品群である。また梅堯臣詩の中で、慶曆後期における詩風の變化が晩年の詩作においてどのように結實していくのかを檢討することが當然課題となるだろう。慶曆後期以降は、詩の樣相、詩作の場ともに變化しており、複雜な展開が預想される。詳細に調査を進めた上で、改めて慶曆後期の意味の

検討に取り組んでみたいと思う。

注

（1）　筧文生「梅堯臣論」（『東方學報』三六、京都大學人文科學研究所、一九六四年十月）に、梅堯臣が妻の死去（慶曆四年）以降に日常生活の細部を積極的に詩にうたい込むようになること、慶曆五～六年頃が詩に關する議論が集中する點で重要な時期であることが指摘される。

（2）　正式には許州。梅堯臣が多く許昌の稱を用いるのに從った。

（3）　姓名未詳の許州通判との間にも十首の詩が殘るが、交流時期や上官という立場が他の面々とは異なる。應酬の內容も慶曆三年以前のそれに似るので、本稿では觸れない。慶曆八年に晏殊及び歐陽脩と面會した時にも集中的に詩を殘したが、詩體、詩型、主題など樣々な點で慶曆後期の創作傾向から外れるため、本稿では取り上げない。時期的にも慶曆後期の終盤に當たるため、後の時期の創作との繫がりから考察し、稿を改めて論じたい。

（4）　宋敏修と裴煜の年齡については坂井多穗子「梅堯臣の後半生の交友詩―裴煜と宋敏修について―」（『東洋大學中國哲學文學科紀要』第一七號、二〇〇九年三月）に考察があり、詩句を手がかりに宋敏修は二十歲ほど、裴煜も十歲以上は年少だったのではないかとする。

（5）　墓誌銘等から推定できる交流當時の官職（寄祿官、差遣または館職）は以下の通り。汴京：謝景初（守將作監主簿、簽書武勝軍節度判官）、宋敏求（光祿寺丞、館閣校勘）、敏修（太常寺太祝〔慶曆三年時點〕）、裴煜（不詳）、胥元衡（不詳〔若くして將作監主簿となる〕）。許昌：韓綜（太常博士、三司戶部判官。慶曆四年より服喪）、韓絳（太子中允、陳州通判。服喪）、韓維（守將作監主簿。服喪）、韓縝（將作監主簿〔？〕、知合肥縣。服喪）、王素（刑部郎中、知汝州）、王沖（不詳）、孫永（試將作監主簿）。王素はすでに諫官や路の監司を經驗している。及第の早かった韓綜の官位がそれに次ぐ。

　姻戚關係についても補足しておく。謝景初は梅堯臣の妻謝氏の甥で、父謝絳は梅堯臣の主要な交流相手だった。謝景初は胥偃の娘を娶っており、胥元衡は義理の兄弟になる。韓億が王旦の娘を娶ったので、王沖王素は韓氏兄弟の叔父に當たる。

（6）　『中國韻文學刊』第三四卷第一期、二〇二〇年一月、四四頁。

（7）　謝絳との詩作と謝景初との詩作における梅堯臣の創作態度の差については、拙稿「梅堯臣の聯句について」（『中國中世文學研究』第七〇號、中國中世文學會、二〇一七年九月）で考察した。

（8）　前揭注（1）筧氏論文に指摘がある。梅堯臣の詩論を檢討した論考に、横山伊勢雄「梅堯臣の詩論」（『漢文學會會報』第二四號、東京教育大學漢文學會、一九六五年六月）、湯淺陽子「梅堯臣詩の平淡をめぐって」（『人文論叢』第二三號、三重大學人文學部文化學科、二〇〇六年三月）などがある。

（9）　梅堯臣詩のテキスト及び編年は朱東潤『梅堯臣集編年校注』（上海古籍出版社、二〇〇六年新一版。初版は一九八〇年）に從い、『四部叢刊』所收の明・萬曆刊本『宛陵先生集』を併せて參照した。引用箇所には『編年校注』の卷數を示す。韓維詩は『四庫全書』所收『南陽集』を使用した。

（10）　「喜山鵲初歸三首」其一（『全唐詩』卷六三三）。山鵲を描寫する詩自體が少ない中、司空圖は例外的に連作三首を含む四首でこれを主題とする。

（11）　趙幼文『曹植集校注』（中華書局、二〇一六年。初版は人民文學出版社、一九八四年）卷一、一頁。

(12) 梅堯臣より後の詩には「山藥」が明らかにヤマイモを指すとわかる描寫があるが、唐詩の用例には本詩と同様、ヤマイモと斷定できる描寫がない。「水蔬」と竝列されるなど、山の藥草と解釋した方が良さそうな例も見られる。北宋・寇宗奭『本草衍義』は、「山藥」の名稱は唐代宗の諱（豫）と宋英宗の諱（曙）を避けて「薯蕷」各字が改められたものとする。梅堯臣の生きた仁宗期にはまだヤマイモを指さなかった可能性もある。

(13) 陶敏・王友勝『韋應物集校注』（上海古籍出版社、二〇一一年、初版は一九九八年）卷八、五二六頁。

(14) 尹占華・韓文奇『柳宗元集校注』（中華書局、二〇一三年）卷四三、三〇〇五頁。

(15) 『文選』（胡刻本。以下同じ）卷二六。

(16) 『宋書』（中華書局、一九七四年）樂志三、六一六頁。

(17) 「吝」、本作「㕣」。夏敬觀注云「㕣、古文吝字」。

(18) 「畢意」、校注によれば各本異同はないが、他の作品に用例がほとんど見られず、「畢竟」の誤りの可能性もある。元禛「解秋十首」其七（冀勤『元禛集』（中華書局、二〇一〇年、初版は一九八二年。底本は宋鈔本『元氏長慶集』）卷七、九〇頁）に「年年百草芳、畢意同蕭索」とあるが、『四庫全書』本は「畢竟」に作る。その場合も「結局は臼で搗かれてしまう」という大意は變わらない。

(19) 梅堯臣詩二十六句、韓維詩二十四句。韻字は順に「畝」「酉」「斗」「朽」「走」「有」「後」「厚」「偶」「九」「友」「取」「酒」、韓維詩は斗韻を缺く。『四庫全書總目提要』によれば韓維『南陽集』は文字に亂れが多いらしく、韓維詩に缺落がある可能性がある。そうであれば、詩題に「依韻」とあるが次韻詩であったか。

(20) 前掲注（14）書。卷一七、一一七二〜七三頁。

(21) 班固「荅賓戯」（『文選』卷四五）「孔席不暖、墨突不黔」の李善注に引く『文子』自然に「墨子無黔突、孔子無煖席、非以貪祿慕位、欲起天下之利、除萬民之害也。（墨子の突を黔（くろ）ます無く、孔子の席を煖（あたた）むる無きは、以て祿を貪り位を慕ふに非ず、天下の利を起こし、萬民の害を除かんと欲するなり。）」とある。

(22) 汴京での交流において戯れの姿勢が特に顯著な作は、前掲注（4）坂井氏論文、前掲注（6）朱氏論文にも數首取り上げられている。妻の甥である謝景初については、綠川英樹氏が梅堯臣と黄庭堅とを繫ぐ存在としてその重要性を指摘する（「梅堯臣與黄庭堅―兼論北宋詩壇『怪巧』風格的嬗變」（『中國詩學』第八輯、人民文學出版社、二〇〇三年六月）。慶曆後期の交流の中で見ても、謝景初との間で交わされた詩の主題や表現は「崩し方」が極端である。應酬が慶曆後期の最初期に集中する點も注目に值する。「奉和子華持國玉汝來飲西軒」のように宴の描寫が生活の細部に及ぶのは、謝景初との聯句より始まる。綠川氏は對謝景初詩の中で類似の表現が繰り返される點に言及するが、他の人物に對しても、應酬の中で生まれた表現を別の機會に使ったと見える例が多數確認できる。謝景初との詩作活動が慶曆後期の最初期に當たる位置にあり、續く若者たちとの交流で轉用が繰り返され、新たなうたい方が梅堯臣の手法として定着していったのではないか。謝景初との詩作については、稿を改めて丁寧に檢討したい。

(23) 王泗原著『楚辭校釋』（中華書局、二〇一四年、初版は人民教育出版社、一九九〇年）三〇八頁。

(24) 清・郭慶藩撰、王孝魚點校『莊子集釋』（中華書局、一九六一年）卷一〇下、一〇八二頁。

(25) 前掲注（22）綠川氏論文に指摘される謝景初から黄庭堅への繼承關係が確實な例である。

※本稿は令和二年十月十、十一日に開催された「日本中國學會第七十二回大會」の口頭發表をもとに加筆修正したものである。數々の貴重なご意見をいただいた先生方に心よりお禮申し上げる。